

## 讃が歌えない

### 恩徳

報恩講の中心のテーマは、

如来大悲の恩徳は

身を粉にしても報ずべし

師主知識の恩徳も

骨を砕いても謝すべし

といわれるご和讃です。阿弥陀如来の御恩に対して身を粉にしても深く感謝しなければならぬ、教え導いて下さった先輩方には骨を砕いても感謝しなければならぬと親鸞聖人は述べています。

「このご和讃にメロディをつけたものが、「恩徳讃」です。御存じのように、法座の後には必ず歌われます。私も皆さんと一緒に、「恩徳讃」を数えきれなく歌ってきました。ところがある時、歌えなくなりました。それは、いままでも無自覚に歌ってききましたが、「本当にこのころから身を粉にしても、また骨を砕いても

も感謝しようと思っているのか」という内

面の声が聞こえてきたからです。本心から身を粉にするとか、骨を砕いても感謝しようなどと考えていない自分が見えてしまったのです。それが見えてしまうと、自分の周りで歌っている人々の声が、空々しく感じられました。この人たちは、本当に身を粉にしたり、骨を砕く覚悟で歌っているのか、ただ無自覚に歌っているだけではないのかと。そのように感じてしまふと、もはや「恩徳讃」を歌うことができなくなりました。ですから、皆さんが歌っている間、私は沈黙していました。ところが、再び歌えるようになるのです。それはどうしてかと言えば、「恩徳讃」は身を粉にしても、また骨を砕いても感謝しようとする者が歌うものでなく、感謝のこのころのまったくない者が歌うものだといふ気がしたからです。

## 報恩講は問恩講なり

ほうおんこう

もんおんこう

東京都江東区 因速寺住職

たけだ

さだみつ

武田 定光 氏

### 報恩は背恩講

### 損得勘定の報恩

私は「身を粉にしても報ずべし」、「骨を砕いても謝すべし」の「べし」は、親鸞聖人が私たちに向かって、「少しでも感謝しなさい、感謝できるようになさい」という命令だと受け取っていたのです。ところが、本当は、親鸞聖人自身が阿弥陀さんから「報ずべし」と命令された絶対命令だったのです。もし少しでも感謝の気持ちを持つような者であれば、阿弥陀さんが、直々に「報ずべし」と命ずる必要もないのです。

親鸞聖人ご自身は、赤裸々に「悲しきかな、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚の教に入ることを喜ばず、(略)恥ずべし、傷むべし」(『教行信証』信巻)と述べ、「愛欲」と「名利」という損得勘定の煩惱に執われ、とても仏法を喜ぶ思いすらないと嘆かれます。

もし親鸞聖人が、ご自身のこのころの有り様を見て嘆いておられるのであれば、それは単なる反省に過ぎません。しかし、おそ

らくそうではないでしょう。親鸞聖人に、「恥ずべし、傷むべし」と嘆かせているものこそ阿弥陀さんではないでしょうか。この阿弥陀さんのおころが、「身を粉にしても報ずべし」と命じてくるのでしょうか。私には決して「報恩」のこのころはない、「恥ずべし、傷むべし」と教えて、「身を粉にしても報ずべし」と命じてくるのです。

ですから、阿弥陀さんが「報ずべし」と命ずる対象は、まったく感謝のこのころのない恥ずべき、傷むべき存在です。そもそも私たちが感謝のこのころを起すのは、どういう時でしょうか。何か特別なものをもつて有り難うございますというのが感謝のこのころです。つまりそれは損得勘定のこのころではありませんか。自分にとつて都合のよいもの、あるいは都合のよい状態であれば感謝するのです。しかし自分にとつて都合の悪いもの、あるいは都合の悪い状態であれば感謝することはできません。そうになると、結局、阿弥陀さんに対して感謝すると言つても、そういう損得勘定の範囲内で行っているに過ぎません。損得勘定の範囲内の「報恩」であれば、「報恩

### 報恩講は問恩講

講」ではなく「背恩講」でしょう。まさに恩に報いると言いながら、自分の損得勘定で喜んでいるだけです。御恩に背いているのです。

そこで私は、「報恩講」の意味を具体的に表す名前として「問恩講」と名づけたと思います。それは阿弥陀さんの御恩とは何かと、(初心)に帰って問い返される集いという意味です。さて、私は阿弥陀さんから何をいただいたのでしょうか。

しかしそうやって問い返されてみると、私には何もありません。私には損得勘定を抜きにした「報恩」など、どこにもありません。まさに「恥ずべし、傷むべし」です。しかし、ここが阿弥陀さんの絶対命令を受ける場所、つまり「問恩講」です。自分が感じている御恩など、すべてを阿弥陀さんに奪い取られ、「さて(本当の報恩とは?)と(初心)に帰されます。突き詰めて言えば、真宗の報恩講とは、日々の一挙手一投足に問われていることなのです。

